第４回　昭島市総合基本計画審議会　第２部会
議　事　要　旨

［日　　時］平成 22 年 5 月 19 日（水）19:00～20:40
［場　　所］昭島市役所　3 階　庁議室
［出 席 者］
1　委員
　石崎忠司部会長、平畑文興副部会長、岡田明恵委員、川元英貴委員、竹村茂己委員、中野久史委員、長谷川祐司委員、福田晃委員、矢崎まゆみ委員
　（欠席者）稲員とよの委員
2　事務局
　佐藤総合基本計画担当主幹、柳主査
3　コンサルタント会社
　白鳥、田中

［日　程］
1　基本計画素案
　第 6 章　躍動する　あきしま（産業の活性化）について
　活力を育む（産業の振興）
（1）産業振興の柱
（2）商工業
（3）農業
（4）観光
2　その他

［配布資料］
・第 4 回昭島市総合基本計画審議会第 2 部会日程
・資料 1　　第 6 章　躍動する　あきしま（産業の活性化）
・第 3 回昭島市総合基本計画審議会第 2 部会議事要旨

[議事要旨]

○議事録の確認

前回の議事要旨の配布があり、気付いた点があれば平成 22 年 5 月 28 日までに事務局へ連絡することで内容の確認を行うこととした。

○住宅密集地の防災対策について

前回福田委員から住宅密集地の防災対策について質問があり、防災対策の面で考えていると説明をしたが、再度担当と調整した結果、都市計画の分野での対応が適切ではないかとの結論となった。案文については、現在調整しているので、全体の取りまとめの中で提案したい。

１　基本計画素案

【説明】

事務局より、資料１「第 6 章　躍動する　あきしま（産業の活性化）」の説明があった。

【質疑応答・意見】

（１）産業振興の柱

（「施策の目指す姿」について）

■「施策の目指す姿」（P2）の文言に「人材の確保と育成」と「地域との共生」に関することは入っているが「産業の強化」に関する文言がなく、内容が少し乖離しているような気がする。【石崎会長】

○最後の部分の「力強く展開しています」というところが「産業の強化」の部分になる。目指す姿の中ではそういった位置づけをした。施策の体系の中では「産業の強化」をトップの項目としている。【事務局】

（リタイア世代のまちづくりへの活用について）

■生産人口が減少しているのはわかるが、その分リタイアした人の人口が増えている。まちづくりの活性化ということであれば、今の産業をそのまま活性化するのではなく、その人たちの持っているものを産業等にどうやって生かしていくかというコンセプトやその年代をいかに取り込むかということが一言あっても良いのではないか。【福田委員】

○生涯現役というか、働けるうちは働きたいというのが市民の願いであると理解している。この部分は産業の振興という意味でどのように昭島の産業基盤を力強くしていくかという位置づけが中心になっている。高齢者の活力を生かすという部分は、高齢者の福祉、社会のコミュニティー等でフォローしていきたい。しかし、非常に重要なポイントなので、実際に地域の中で活躍していることや今まで培ってきた技術力を生かす場所、という視点がどこかにあっても良いと思うので、再度位置づけについて検討したい。【事務局】

■ＯＢを活用することでまちの活力に寄与するのではないか。【福田委員】

（農業のウェイトについて）

■商工業と農業と観光となっているが、農業のウェイトはわずかで、これを全部同列に置いて良い

のか。確かに観光と農業というのは密接に関係しており、昔からの生産緑地の保全・維持は非常に重要なので同等だと言う気はするが、市民から見ればもっと商業や工業でやって欲しいのにウェイトの低い農業と同じにするのか、という疑問が出ないとも限らないのではないか。【石崎会長】

○昭島の農業がこれからの昭島を支える中心的な産業になるのは確かに難しいが、食を通じて生活に密着をしているという点から市民の関心は高い。市としても、農業がまちの中にある風景を残していきたいという観点から産業の一つの柱、活力の一つの柱として位置づけている。昭島の産業は他市と比べて工業、先端技術の会社が多く、それが活性化や基盤整備に繋がっているのは事実ではあるが、逆にこういった都市部にあるからこそ農業は守り育てていく必要もある。この点は市民にも理解していただいているようなので、ご指摘のような心配はないと考えている。【事務局】

■目玉になるようなものを見つけ出す姿勢があるのかないのか。それからのスタートだと思う。農業も昭島のような環境の中でこれから 10 年やっていけるのか。観光だとか市民農園に結びつけるんだったら、そういう方向で取り挙げた方が良いのではないか。4 つが同列になっていてバランスが取れていない感じがする。どこにウェイトを置いて、具体的にこういうことをやるんだというものを絞り込んだ方が良い。そうすることにより、取り組んでいく過程で昭島らしさというものが出てくると思う。【岡田委員】

○今後10年間は観光で人を呼んで活性化を図ろうというのが主要なポイントになってくる。ただ、昭島の産業構造からすると工業、商店街、農地というところも外していけない。それがきちんとした活用になるかどうかというのは、これからの行政側の努力である。【事務局】

■昭島は最終商品を作るのではなく、大きな企業の製品の一部分を作っているのでその商品が流れてしまえばその仕事は無くなってしまうし、海外へ移転されても無くなってしまう。難しいことをたくさん含んでいる。【平畑副会長】

○特に今の世の中では海外に生産拠点を移す企業も大変多い。そういった企業の下請けとして部品を作っている企業がある意味で苦しい立場になっていることも事実だが、各事業者が納品しているところとはまた別のところと手を組んで新しいものを作っていくとか、あるいは多摩地区の産業拠点が昭島市域にでき、高度な工作機械や検査機器が使えるようになってきているので、技術力でそういったところを乗り越えていく。もちろん根底には企業としての実力があるといったことや、経営者の中にはそういった意気込みの方もいらっしゃるので、そういったところを市としても応援しながらこれからの 10 年間活性化を図れるようにしていきたい。【事務局】

（２）商工業

（施策の目指す姿のイメージについて）

■「技術力に根ざしたものづくり」（Ｐ５　施策の目指す姿）というと、地場産業等昭島市に特有のものがあり、それをさらに発展させるという印象が出てくる。大企業が来て工場を建ててしまうと、それ自体が最先端の技術を持っているので、それも含めてイメージしているのか。【石崎会長】

○昭島の工業の特性として先端技術に根ざした企業がある程度集積し、産業の一つの基盤になって

いる。そういったところで技術力に根ざしたものづくりが進み、産業が活性化していくといった姿をイメージしている。「活力とにぎわいにあふれたまち」（Ｐ５　施策の目指す姿）というのは、人が訪れてくれて、商業が活力を持って商業活動が行われるというイメージ。そういったことが一緒になって市民の生活が豊かになるというのが目指す姿と考えている。【事務局】

（商業の振興について）

■商業の振興に関してはこういう形の表現なのだろうが、現実として果たしてこういう文言で後継者が育つかどうか。当事者としてみると、これで何ができるかという感想を持つ。【竹村委員】

○確かに厳しいところがあると認識しているが、高齢化の進展の中で、地元で買い物ができるようにしてほしい、スーパー等の進出によって、地元の商店街で生鮮食品のお店が無くなってきていて、身近な商店街で生鮮食品等を売ってほしいといった要望も出ている。近くで生活必需品が買える、スモールタウンといったところへの要望も高まってきている。こうしたところから、市としても技術協力などを支援し、ある程度の商業の活性化は図られていくのではないかと考えている。また、そうしていかないと都市部であっても買い物難民が出て来る状況も考えていかなければならない。商店街の振興というのはそういった面でも、徒歩圏、生活圏内で生活が維持できる、福祉的な意味合いも含めながら振興を図っていきたい。【事務局】

（観光まちづくりについて）

■「観光まちづくり」（P7　基本施策①商業の振興　C観光まちづくりによる商店街の活性化）はその後の（４）観光と二重に出てくることになるが、これは大丈夫なのか。むしろ後ろに載っている方が良いのではないか。【石崎会長】

○昭島市が観光を新たな産業として一生懸命やっていきましょう、となった一つの背景としては、観光によって昭島へ来てもらえば昭島の商店街や町中でお金を使ってくれるということで、商業の振興と一緒に考えている。商業の振興の中でも観光、まちづくりによって商業の活性化を図るということで一つの項目として入れているので、2つが一緒になって観光の活性化に努めていくということで記載をしている。【事務局】

■言葉としてはこういう書き方になるのだろうが、この文章から昭島らしさが読み取れない。観光によるまちづくりの協会はできたが、具体的にどういうことをどういう方向で持っていくのか。「ああこれがやっぱり昭島だね」というのか、どこのまちに置き換えても間違いないものが一つずつ書いてあるのか、観光は特に、市民にとっては大事なことなのではないかと思う。【福田委員】

○まちが並んでいる中で活性化を図るならば、特色を出してそういったものを伸ばしていかないと、昭島だけではうまくいかない。ただ、それを商業の振興という中で位置づけていくのは現時点では難しい。昭島の商店街ははっきりいってまだ再生、これからスタートラインに立つというイメージなので、しっかりと力を付けながら次のステップとして観光とも一緒に昭島らしさを育んでいくといった方向性を念頭に置きながら、まずは体力を付けていく。そういったところでこのような書き込みになっている。【事務局】

（建設業について）

■「足腰の強い建設業」（P6　【課題】■工業）というのは、何をイメージしているのか。【川元委員】

○苦しい中でもきちんとした経営をして、きちんとした仕事をしていけることを「足腰の強い」と表現した。【事務局】

■昭島市としては、どの程度昭島市の建設業の皆さんに仕事を回すのか。そこは市議会の方で問題になるのだろうと思うが、非常に難しいところだと思う。【石崎会長】

○この厳しい財政状況の中ではなかなか厳しい。ここ数年は各市とも学校の耐震化の工事が集中しているので、建設投資も若干多いようである。しかし、その次はというとなかなか難しい。市としても市内公共事業には市内の企業の方にできる限り参加していただけるような機会、環境を整えることも検討しながら、一緒になって活性化に努めていきたい。【事務局】

（入札について）

■入札は全て値段なので、ほとんどが市外の業者で、地元の業者はあまりいない。一般の消費者の方はまさか昭島市から来てないということは知らない。そのような状況で、本当に市の商工業の活性化なんてことを言えるのか。【竹村委員】

○市としても工事の発注を分けたり、地元の中小企業の方も参加できるように、一定の条件で入札を行ったり工夫には努めている。しかし、安い方が税金を使わないのでいいという市民も当然いるし、また、それで果たして産業が活性化していくのかということもある。工事の技術力だけではなく、企業が地域に貢献しているとか、環境に良いことをしているといったところも評価に入れながら、総合的な選定ができないかといったことも検討している。なかなか難しい部分ではあるが、市側としては公共事業の発注の中では市内業者の方に仕事をしていただける機会をできる限り設けていきたい。【事務局】

（商店街について）

■「商店街の再生」や「商店街の形成」（P7　基本施策①商業の振興）とあるが、市のスタンスとしてどういう方向に導きたいのか見えてこない。【長谷川委員】

○市としても、どうやって商店街の再生を図るのかというのは非常に難しいが、色々なやり方があると考えている。1つは徒歩圏で生活できるという位置づけで、近くのお店で日常品が買えたり、朝市で地元の安全で新鮮な野菜が直売で手に入ったり、その中で様々な世代の交流が深まっていったり、商業という事だけではなくて色々関連しながら地域全体が活性化していくというイメージである。また、空き店舗があるとイメージ的に活力が削がれるような、非常に大きなイメージのロスがある。できる限り空き店舗を利用して、新たなコミュニティビジネスをという話も出てきているが、地域に根ざした福祉的な事業等を支援したりしながら、そういったことを中心にして、できる限り空き店舗を出さないように、地域に根ざした商店街をつくるということも１つのイメージとして持っている。【事務局】

■時代は相当変わってきており、無店舗販売（インターネット）によって品物が何でも安く買えて、場合によっては送料も無料になっている。衣料品にしてもデパートやスーパーに寸法を測るために試着に行って、インターネットで注文という風になってきている。何十という店があって、全

部値段が違ったり組み合わせによって割引になったり、そういうので店舗に人が買いに行かなくなっているのではないか。だから商業が発展するというのがなかなか難しい。【平畑副会長】

○無店舗販売なりインターネットを活用できる方だけではない。逆に、そういったものが便利ではあるのだけれども、店員さんとの交流も買い物の１つの楽しみという考え方もある。市としては地元の商店街で買い物ができる環境も維持していきたい。【事務局】

■難しいのは、読んでいる方から見ると市が何をやってくれるのですか、というのが具体的に読み取りづらい。質問の回答を聞くとなるほどなと分かるが、読んでいるだけだと良いことは書いてあるけれども、かゆいところに手が届かないような、そんなもどかしさが全体として感じられるような気もする。しかし踏み込んで書き過ぎると、利害の衝突になってしまう面もあり、なかなか難しい。【石崎会長】

（３）農業

（経営耕地面積と生産緑地の面積差について）

■「経営耕地面積で 51.7ha」（Ｐ9　【現状】）と「生産緑地の面積は減少を続け、平成 22 年（2010 年）1 月では 52.8ha」（Ｐ9　【現状】）と差があるのはどうしてか。【中野委員】

○経営耕地面積は一定程度の面積を保有し、耕作して販売していないと計算されないという集計の仕方になっている。生産緑地の面積よりも、現状では経営耕地面積の方が平成 17 年の時点では少なくなってしまっている。経営耕地面積がどういったものかについては説明を入れ、整合がとれていない理由がわかる形にしたい。【事務局】

（都市部での農業について）

■専業農家であれば生産緑地が有効に使えると思うが、一定の生活を維持するために何らかの農業以外の経営をして変わっていくということになると、現状や課題、基本の施策というところだと、これがめいっぱいの表現なのだろうと思う。【中野委員】

○特に都市部であるという背景から、農業の活性化というイメージは持てない部分もある。ただ、農業は市民の関心が高く、昭島の中で残していってほしいという要望も強い。そういった農地、農業がある風景を残すことが産業というだけではなく、市民の癒しといった部分でも役立っていくのではないか。そういった中で市民が農業とふれ合う機会を設け、市民農園等市民が地面に触れて作物を作れるような施策を考えながら農地を守っていくという方向性が、農業に関しては柱になっていくと考えている。【事務局】

■近所に畑がたくさんあるが、専業では食べていけないので生業としている人はいない。アパートを持ったり、会社を辞めてからちょっとした農業をしている。結局そういう手法でやってくしかない。そこをいかに市民と密着した、昭島でこういうものができるんだという特色を出すのが一番だと思う。生産規模の大きい農家と同じような市場に立って出荷することも大変だろうから、それこそ都市部の農業の良い形というのを出して行ければ、特徴としては非常に出しやすいのではないか。【中野委員】

○昭島のブランド的なものが何かできないかと探している。それを小さな店舗でも、地元の商店街で売っていただく。ブランド品としては、だいぶ途絶えていた拝島ネギを復活させていこうかという考えもあるようなので、そういったところで何か昭島の地域ブランドが小さなものでも出て

くると、少し違ってくるのではないか。【事務局】

■八王子インターの道の駅に地元の農家が生鮮食品を持って行っている。こういうものが市のバックアップであれば、書いてあることが非常に生きてくるが、それがないと市民農園と言ったって、1坪の土地を借りてということが中心で、果たして農業というものを維持できるようなものになるのだろうか。【石崎会長】

○確かに道の駅は流行っているようであるが、昭島でも、農協の協力によって農産物の直売店が今年度できることになっている。地元の商店街で朝市での直販をする等、農業をしている方と直接に交流をしながら、昭島産の安全な野菜が買えるということで、そういったところも1つの柱にしていきたい。【事務局】

■今までは売る場所がなくて困り、近所へ売りに歩いていた。「ふれっ旬」が出来てすごく助かった。作っても売れる場所がないと仕方がない。【竹村委員】

■需要側と供給側の方がうまく活性化し、大きなものになっていくのではないか。食というのは日々のことだが、地元で取れた野菜などが買える機会が少ないと感じる。出ているものを見ると、素晴らしいものなので手に取って買いたくなる。そういったところを市の方で頻繁にバックアップできるようになっていくと大きな力になっていくのではないかと常々思っている。【矢崎委員】

○市としてもそういった方向性を持っている。農産物だけではなくて、地元産のお菓子やお豆腐などが一緒になって、地域でこういったものがありますよ、と消費者との交流の中でそういった商いができるということは大変貴重であると考えている。【事務局】

■レジャー農業などといっているが、ぜひとも昭島らしさを残してほしい。【竹村委員】

○昭島のまちづくりの中で農地が風景として残って、地場産の農産物が生産されているところがまちの潤いになっていくのではないかと考えている。是非とも市民の方々、生産者の方々、消費者の方々と協力をしながら、そういったところを目指して行きたい。【事務局】

（4）観光

（観光の具体例について）

■具体的な目玉として何があげられるのか。【福田委員】

○観光まちづくり協会や観光案内所を作る準備を今年度は進めている。具体的には基本施策②観光資源の育成の部分であるが、「水と緑」（P13　基本施策②観光資源の育成　A）は、水道水のことで、例えば嗜好品としてコーヒー、食品としてお豆腐やお蕎麦といったものに繋がるのではないか。美味しい水があって、美味しい食べ物ができるというところがポイントと考えている。

「ウォーキング」（P13　基本施策②観光資源の育成　B）は、例えば五日市線の廃線敷きが道路になっているので、そういったところを歩くということも人気があると聞いている。また、「駅からハイキング」というのも流行っているらしく、どこをどういう風に回ると良いですよといった情報、マップの作成など、駅から降りて昭島のいくつかのスポットを回って駅前の商店でお茶や食事をしていただく。

「企業」（P13　基本施策②観光資源の育成　C）は、昭島は企業がある程度集積をしており、そういったところの資料館等を開放してもらえるように交渉をしている。また市内にはパソコンメーカーもあり、親子パソコン組立教室を開いて安い費用でパソコンを組み立てて持って帰って

もらう。資料にも記載しているが、昭島にある企業は、ある程度の歴史がある中で、どういった方がどういった考えで創業したのか。そういったところを回るようなツアーが考えられている。「歴史と祭」（P13　基本施策②観光資源の育成　D）は、オーソドックスな観光スポットもきちんと案内をしていき、祭の例としてはくじら祭を、よさこいソーランといった踊りをしながら、またそれが競うような、もっと他からの人々が参加できるお祭りに発展させていくとか、色々なポイントを掴みながら人が集まってくるように、1つの方向性に絞るというよりは、そういったものが複合しながら 1 つの観光の柱になっていくといったところが観光まちづくりの中で考えられている。【事務局】

■歴史はあるけれども、それが大きな目玉になっている程のものはない。だからこれから作っていくんだ、という意気込みを感じる。例として出たよさこいソーラン祭を始めた人の声を聞いたことがあるが、今や札幌で一番人が集まるのはよさこいソーランで、決して雪祭りではないらしい。何かそういうものを作れたら楽しいだろう。【石崎会長】

○今検討の途中でもあるので、そういった方向性が見出せるように市としても努力をしていきたい。【事務局】

2　その他

■本日のところは文言の修正とかいったことが特に出てきているわけではない。ただ、考え方を説明する準備だけはしておいてほしい。こんなところでまとめられるのかなと思う。いずれ市民の方に説明する際に、市としてはこうだというところは事務局としてしっかりと説明してほしい。【石崎会長】

次回は、6 月 24 日開催予定。